㉜尾花沢雅楽（おばなざわ がく）

［市指定無形文化財］ 尾花沢市

寛政3年（1791年）に京都御所楽部の安倍季康から学んだ伝授書が念通寺門徒である鈴木清蔵（鈴木九左衛門）家に残されている。紅花交易が盛んだった頃、最上川舟運を介しもたらされたといわれ、三鼓三管が揃っており京都の流れをくむ正調な雅楽といわれる所以となっている。越え天楽、五常楽急、太平楽急などの曲目がある。戦中一時中断したが、戦後復活した。

㉝尾花沢まつり囃子（ばやし）

［市指定無形文化財］ 尾花沢市

尾花沢花笠まつりの初日（毎年8月27日）に諏訪神社の遷宮式祭礼の一つとして奉納されている。まつり囃子は、三味線、笛、太鼓による編成となっており、その調べは最上川舟運によりもたらされ祇園囃子の流れをくむといわれている。

また、文政10年（1827年）に押物（屋台）に飾られた絵図が市内に残されている。

㉞谷地八幡宮（やちはちまんぐう）

河北町

寛治5年（1091年）、源八幡太郎義家創建と伝えられる。天正年間には白鳥十郎長久が谷地城築城の時、白鳥村（現村山市）から現在地に移し鎮守社としたと伝えられる。江戸時代初期には林家が谷地八幡宮の社家として迎えられ、現在に至っている。毎年9月、紅花染めの衣装を身にまとった楽人が舞う林家舞楽が奉納される。

㉟慈恩寺旧境内（じおんじきゅうけいだい）

［国指定史跡］

寒河江市

江戸時代の古地図によれば、東西約１km・南北約5kmに及ぶ境内で、江戸時代には宝蔵院、華蔵院、最上院の3ヶ院と48坊からなる一山寺院であった。当時の寺領2,812石余は東北一。慈恩寺本堂から遊歩道が整備されており、裏山山頂の山王堂跡からは山形盆地が一望できる。

㊱木造弥勒菩薩及び諸尊像
附 弥勒菩薩像像内納入品

［国指定重要文化財・彫刻］

㊲本山慈恩寺本堂

［国指定重要文化財・建造物］ 寒河江市

慈恩寺の創建は、インドの婆羅門僧正が聖武天皇に奏上後、天平18年（746年）に勅命を得て弥勒菩薩を本尊とし開山された。その後、藤原氏の庇護を受け諸堂造営が行われた。京文化を伝える平安後期の仏像14体を今も有する。本堂は元和4年（1618年）、山形城主最上氏によって再建され、桃山時代の様式や重厚な茅葺屋根を今に伝えている。天井には八方にらみの竜や鮮やかな六面の天女の図板が懸けられ、堂内には現在、本尊弥勒菩薩ほか秘仏33体が内陣の宮殿に安置されている。本尊脇侍の釈迦・地蔵・不動・降三世の五仏構成は国内では例がないもので、胎内納入の印仏には鎌倉期の多くの寄進者が記されている。また、頭を入れると若返るという古い鋳鉄製の鉢も置かれている。5月5日の一切経会には、紅花衣装をまとった慈恩寺舞楽が奉納される。

㊳芋煮

山形市 寒河江市 天童市 尾花沢市
山辺町 中山町 河北町 大石田町 白鷹町

江戸時代、山形料理の芋子汁に紅花を運んだ最上川の船頭が帰り荷の棒鱈を加えて食べたとか、山形に移り住んだ近江商人が京都の料理に似せて鰊と里芋で紅花取引の慰労会代わりに食べたなど、発祥には諸説ある。昭和の始め頃から牛肉やコンニャク、焼麩、ネギなども加わり、河原で食べる山形の秋の風物詩となった、甘辛く煮立てた醤油味の鍋料理。

㊴おみづけ（近江漬け）

山形市 寒河江市 天童市 尾花沢市
山辺町 中山町 河北町 大石田町 白鷹町

青菜、大根葉、かぶの葉などを細かく刻んで合わせ塩漬けした漬物。江戸時代、紅花を求めて山形に移り住んだ近江商人が、青菜の葉先を捨てていたのを見てその余った野菜を無駄なく使う方法として伝えた。「近江漬（おうみづけ）」がなまって「おみ漬（おみづけ）」になったという。

❼深山和紙

［県指定・無形］

白鷹町

高価な商品作物であった紅花（紅餅）は、厚紙で作った「花袋」に入れられ、さらにムシロで包み出荷された。往時、白鷹町深山地区で作られた和紙は地元産の紅花の花袋として使用された。その製作技術は今も当地に引き継がれている。

❽大石田河岸絵図

［町指定・歴史資料］

大石田町

江戸時代、紅花交易などで最上川舟運最大の河岸として賑わった様子を伝えるもの。護岸築堤がなされ、多くの物資が往来できるように最上川の流れに沿って東西に貫いて大通りが設けられ、整備された町並みの様子がわかる。

❾大石田河岸の景観

大石田町

紅花は川の難所を避けて生産地から大石田までは陸送され、大石田河岸から舟積みされて上方へと送られた。最上川から店棚を通って表通りまで通じる路地「ろうず」が残る家屋などから往時の河岸の様子をうかがい知ることができる。